

ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』について

瀧澤, 克己

<https://doi.org/10.15017/2544124>

出版情報 : 哲學年報. 12, pp.167-173, 1952-01-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ヘーゲル『キリスト教の精神』

その運命』について

瀧澤克己

カントの『理性批判』の精神を喪失して、再び獨斷的な形而上學に落ち込んだロマンティズム思潮の頂點——ヘーゲル哲學に對するこういう批評はすでに久しい。新カント派の反省の空しさ、フッサールの直觀の囚われ、いわゆる生哲學の體驗の不徹底があらわになつた今日もなお、互いに相對立する二つの陣營から、同じような批評が繰り返されている。云うまでもなく、一つは人間の自己そのものの個體的・現實的存在 Existenz を遊離しているという、實存哲學からの非難、他は、一切の人間の・歴史的發展の基礎をなす物質的制約を無視しているという、史的唯物論からの批判である。

眞に主體的・實踐的でない、その體系の辯證法的展開は甚だ壯觀ではあるが、現實において、個人をも社會をも變革する力を有たない、——そういう批評は、或點たしかに、ヘーゲル哲學の重大な缺陷を突いているであろう。しかし、誰でももの受け容れやすいそのような常識からは甚だ意外なことではあるが、ノールの編纂した『青年期ヘーゲルの神學的諸勞作』『Theologische Jugendschriften』は、少くともこの哲學の最初の動機が、ただ自己自身のために、當時のドイツ國民のために、日々の生活の眞に搖ぎない據り處を發見すること、教育と政治の根本に關して最も徹底した實踐の方法を樹立するにあつ

たことを、一點疑いの餘地なく示しているのである。

若いヘーゲルは、幼な兒のように屈托のない人間本性 (menschliche Natur) の發露として、ギリシャ的な美に憧れた。と同時にかれは、十八世紀末葉のドイツの子として、その最も華やかであつた昔から薄暗いかげのように、ギリシャの美に付きまとつていた人間の「運命」から一刻も眼を外らすことができなかった。無論かれは、キリスト教會がもともとこの運命を徹底的に克服する福音を宣べつたえるものとして登場したことを聞き知つてゐた。しかし神學生としての六年間の努力にもかかわらず、かれは、傳統的キリスト教の他律主義に對するほとんど本能的とも云うべき烈しい嫌惡を如何ともすることができなかつた。いきおい、まずカントの道徳がこのようなかれの心を惹きつけた。なぜなら、人間の自由への憧れと暗い運命の不安に悩むその頃のヘーゲルにとつて、どこまでも人間的・自律的でありながら、しかもあらゆる有形の美を超えて永遠の權威をもつカントの

“Moralität”こそ、イエスの教えの眞實の核心をなすものと思われたからである。一つにはドイツ國民に新時代の、眞の宗教を興えるために、かれはかれ自身のモラリテートの説教者、實行者としての『イエスの生涯』
《Das Leben Jesu》(1975)を書きさえした。しかしそれを書き終るや否や、かれはたちまち、カントの倫理が、人間の自己そのものの矛盾と分裂を甚しくこそすれ、決してそれからの救いを齎らすものではありえないことに氣づき始めた。當時のヘーゲルの心境には、おそらく、律法についてのパウロの嘆きに近い何ものかがあつたであらう。

いつ、どこで、どのようにしてであつたか、わたくしはいま、それを、一々つまびらかにする手だてを有たない。しかしわれわれの當面している『キリスト教の精神とその運命』(一八〇〇年)を詳細に讀む者は、それから數年後のヘーゲルをして、右のような矛盾と分裂とから脱却せしめたものが、かれ自身の『イエスの生涯』の空

虚さに比べて、まづたくその類を異にする四福音書そのものの不可思議な壓力と無關係でありえなかつたことは、これを認めないわけにいかないであらう。

『キリスト教の精神とその運命』におけるヘーゲルが、福音書の傳えるイエスの生涯を本質的にまた歴史的に、どこまで正確に感じ取つたか、——その點を立ち入つて云えば、今日甚だ多くの議論がありうるであらう。しかしこの時のヘーゲルがともかくもすでに、純粹な理性あるいは良心の權威への囚われを脱して、自己存在の事實そのものに還つて來たこと、カントにとつては單に人間的な良心からの「要請」にすぎなかつた神が、ヘーゲルにとつてはいまや、この事實そのものに宿る絶対のロゴス、人間にとつてそれを拒否することの本來まづたく不可能な生命そのものとして、脚下に受けとられたことは、疑いを容れない事實だと思われる。人間の本性もしくは自然 (*menschliche Natur*) そのものが、事實において

は單にいわゆる人間的な諸能力から成り立つていたので

はなく、逆にかえつて、すべてこれらの能力を絶対に否定するものを含んでいる。しかもすべてそれらの能力がそこにおいて事實絶対に斷たれている處、そこにすべてそれらの能力の生れ出る點があるのである。

ギリシャ人の「運命」は、單に外からかれらを襲つたのではなく、むしろ、かれらのもろもろの優れた能力とその成果にもかかわらず、まだこの一つの事實を觀るには至らなかつた——あるいはもつと厳しく云うなら、この一つの事實を無視していた、この意味においてかれら自身の招きよせた——その必然の結果にすぎない。いな、ひるがえつて思えば、一般に人間の「運命」といわれるものは、その實却つて、人間の自己成立の根柢に今もなお太初の日のごとく現在する永遠の生命の證據、絶対の愛なる神の侵すべからざる權威の徴であつたと云つてよいのである。

運命から生命へ立ち還る可能性は、われわれ人間にとつて、その歩みゆく各瞬間に、生命そのものにおいて、

すでに興えられている。それなればこそわれわれ人間の罪はどこまでも云いのがれるすべのない罪であり、われわれがそのもとに苦しむ「運命」はその瞬間におけるわれわれ自身の所爲なのである。これに反して、ひとりナ

ザレのイエスは、生命そのもの右のごとき可能性の、現實の人としての、完全な實現であつた。それは人間が本來、ただそのような形においてのみ、それ自身でありうる姿であつた。かくのごとき人として、イエスは、かれの弟子たちを始め、すべての人々に、かれ自身のごとくなることを、ただかれの弟子となるだけではなく文字どおりかれ自身の友となることを、求めた。しかるに、後々のキリスト教會は、そのように、自己自身の根柢に働くイエスの靈を受けてイエスの友となるかわりに、ただイエスの姿に囚われて、再び、曾てのギリシヤ人やユダヤ人のそれよりも甚しい運命の囚虜となつた。七つの悪鬼を引きつけてもとの棲家に歸つてくる悪鬼の比喻は、不幸にもキリスト教會そのものに當てはまる「運命」

となつた。——ヘーゲルが、彼自身の新しい信仰を、『キリスト教の精神とその運命』として告白せざるをえなかつた所以である。

以上のようなヘーゲルの思想のなかに、ひとは容易に、個體即絶對者、現實即理性という後年のかれの體系の基礎、したがつてまた派生的抽象的な立場もしくは對象から一步步、より根源的具體的なそれらへと、必然的に發展する辯證的運動の萌芽を見て取ることができるのである。まさに萌芽として、それはまだ後々の『論理學』や『哲學體系』のように整つてはいないし、また哲學上のあらゆる問題に詳しく説き及んでゐるわけでもない。しかしそのかわりそれは、この數年後、歴倒的な情熱を以て吐露せられた『精神現象學』に比べてさえ、かれの哲學、かれの體系として凝固してゐない。『キリスト教の精神とその運命』のヘーゲルは、一面、すでに新しいかれの思想、よしいかに正しいものにもせよかれ自身の

獲得した一つの觀念を絶對的な中心とする固定的體系への危険な傾きを孕みながらも、他面まだ、そのようなかれの思想が、そこから誕生した、生命そのものの自然の基盤に密着しているのである。

かれのそれまでの意識がそこに消え、新しい認識がそこに生れた生命の基點それ自身を、自然の物としての人間を、さらに精密に省察するよりも、むしろ新しく生れたその思想を絶對的な出立點とし、また目標として、自然と人生の全體と、歴史の全發展を解釋しようとしたこと、それはたしかに、フオイエルバッハの批評のとおり、ヘーゲルがなお悪しき意味において中世的・神學的なもの、科學以前の囚われた考え方を、完全に抜けきらなかつた證據であつた。いかに壯麗であつても殻は要するに殻にすぎないことを見抜いて、自然の物としての人間の、ありのままな生活の上に眼を轉じたこと、しかも、資本主義社會の徹底的な觀察と分析を通して、人間の歴史の物質的な動きを支配するロゴスを、少くともその經

濟的生産力の本質に關わるかぎり明確に把握して、將來の研究の方法を確立したこと、それは云うまでもなく、頭で立つていたヘーゲルの辯證法を足で立たせるといふ、史的唯物論者の功績である。さらにまた、人間の心の奥の奥、肉體の芯の芯からの不可解な動きをそれとして純粹に考察しつつ、人間の存在、いな存在一般の窮極の祕密を明確に把えることは、現代の卓越した實存主義者に共通な念願であらう。これらはたしかに、ヘーゲルの哲學に比べて、それぞれの意味でいつそう科學的な、自由な態度であるといつてよいであらう。われわれは今日もとより、ヘーゲル哲學の體系を、そのままの形で受け入れることはできない。しかし、それにもかかわらず、かれの體系の中心となつた思想が、最初にそこから現れた生命の基盤そのものは、かれがそこに撞着したその幸いな日と同じように、今日のわれわれにとつてもまた厳然として存在している。そのかぎり、現實的なものは理性的なものだと云い、個物がすなわち絶對の普遍者だと

云つたかれの言葉にも、決してこれをむげに斥けることを許されない、永遠に新しい或る眞實が含まれていると云わなくてはならない。唯物論者のあらゆる嘲笑にもかかわらず、現實に存在する物そのものはかれらのまつたく考え及ばぬ深さを潜めてかれら自身をあやつりつつある。と同時にそのように實存する物の深處は、いわゆる實存主義者らの嗜好と饒舌に關わりなくそれ自身において明確なロゴスを宿して、われわれがそれに耳傾けるのを待つている。もしもひとびとが「現實的なものは理性的である」と云つたヘーゲルの哲學を、そのそもその故郷にかえして、さらに精密に吟味する努力を怠り、いたずらにかれの思想の觀念性とかれの體系の抽象性とを非難するならば、それはただかれら自身、ほしいままに眞實の歴史の基盤を限り、「實存」する物そのものの限界を忘れて、空しい幻を描きつつあることの、何よりの證據となるばかりであろう。

以上略説したとおり、ヘーゲル哲學の既成の觀念を、

この哲學の誕生にまでさかのぼつてもう一度吟味することとは、今日の實存主義と史的唯物論のそれぞれに缺けているものをふたたび見出すためにも、きわめて大切である。そうしてこの新しい吟味のためには、ヘーゲルが眞にヘーゲルとなつた後の、最初のまとまつた勞作として、われわれはどうしても『キリスト教の精神とその運命』を缺くことができない。多くの場合、これをすどおりにして、そうでない場合にも、デイルクイ流に歪められた「青年時代のヘーゲル」を介して、かれの『論理學』や『體系』が論じられてきたことは、わが國の哲學にとつてはもとより、宗教にとつて、文學にとつて、いな社會科學にとつてさえ、一つの大きな不幸であつたと云わなくてはならない。

(一九五一・六・二九)

〔附記〕 本稿はもと、ヘーゲルの『Der Geist des Christentums und sein Schicksal』の、木村毅氏(西南學院助教授 社會政策擔任)による邦譯のための序文として書かれたものである。ヘーゲルがこの論文において、イエス以前のユダヤ

精神を、イエス自身のベルグーンを、ひいてはイエス以後の教會の「運命」を、それぞれに解釋し、理解し、また批評したか、また、この論文におけるヘーゲルのキリスト教批判が、いかに後々の『精神現象學』や『宗教哲學』における同じ批判と關聯しているか——すべてこれらの點に關して一々詳しい例證を與えることは、一つには紙數の都合もあつて、遺憾ながらこれを他の機會に譲らなくてはならなかつた。ただ、木村氏の邦譯が、もしわたくしの判斷に狂いがないなら、少くとも今日まで世に出たものに比べて、はるかに精確かつ平易なもの——と云つてもそれは無論、原文の、また問題そのものの性質上、讀者自身の長くかつ苦しい思索を要求しないわけにはいかないが——であるにもかかわらず、出版界のパニツクはいまだにこれを世に問う機會を與えないので、若干の紙面に餘裕のあるのをさいわい、取りあえず、本稿だけを活字にして、大方の批評を仰ぐこととした次第である。